

黒人と20世紀初期におけるアメリカの移民問題

——W・E・B・デュボイスの移民観——

竹 本 友 子

はじめに

近年のアメリカ合衆国移民史研究の顕著な発展は多くの人が認めるところであろう。そこにおいては、かつてのように多様な民族からなる移民がアメリカ人としていかに同化されていったのかが問われるのではなく、1990年代以降のホワイトネス研究の影響下に、「多様な移民集団がいかに社会的に人種化されてきたのか」ということに関心が向けられている。とくに1920年代における移民制限の動き、なかでも合衆国移民史の最大の転換期となった1924年移民制限法によって、当初は「人種的劣等者」として差別された南欧・東欧系の新移民が白人化され、同化可能な構成員として合衆国に組み込まれていったことが主張されるようになった⁽¹⁾。

1924年移民制限法は直接的にはヨーロッパ系移民をその出身国によって区別し、アメリカ市民として迎え入れるのが好ましいとされた西・北欧系の移民の割り当てを増やし、劣等とされた南欧・東欧系移民の割り当てを削減することを目指したものである。しかし同時にこの法律は、南欧・東欧系を含めたヨーロッパ系移民に対して等し並にアメリカ化の可能な白人として入国枠を割り当てる一方で、アジア系、アフリカ系の非白人を同化の不可能な存在として締め出すものでもあった⁽²⁾。

黒人に関していえば、以上のことは後述するように黒人を無視してヨーロッパ系移民をもっぱら論議の対象とし、割り当て枠を決定するための算定から黒人を除外することなどによって行われたのであるが、そのことによって移民制限の直接の対象ではなかった黒人にも大きな影響が及ぶことになった。すなわち、D・キングによれば、移民制限が盛んに論議された時期はウィルソン政権下での行政府からの黒人の締め出しに見られるように人種隔離が進行し、また黒人へのリンチなどの暴力が頻発した時期であった。キングはアメリカ社会においてすでに黒人に割り当てられていた従属的・劣等な位置を1924年移民法が固定化・強化する役割を果たしたとしている⁽³⁾。移民制限は「白人-黒人の二項対立的『人種秩序』」の形成過程における重要な要因とされるが、そうであるならば、このような移民問題に黒人はどのように対応したのかという点が問題となる⁽⁴⁾。

19世紀後半以降、各種の黒人新聞にはしばしば移民問題が取り上げられ、黒人がこの問題に関心を抱いていたことが見て取れる。移民や移民政策に対する黒人の見方や対応については、すでに四半世紀以上前からそのような一次史料に基づいた研究の蓄積が存在する⁽⁵⁾。

また近年においても、1980年代以降のとりわけ不法移民の問題をめぐる移民論争によって、移民政策への黒人の態度を歴史を遡って見直そうとする傾向が見られる⁽⁶⁾。過去と現在とを問わず、新たな移民の流入によって経済的に最も大きな影響を受けるのは黒人だからである。

移民問題に対する黒人の対応を分析したこれらの研究においては、たとえばD・ヘルウィグやA・シャंकマンが、黒人が中国系移民の締め出しに反対し、移民法の人種差別的側面に敏感に反応したことを強調しているのに対し、L・フックスは黒人が経済面での競争者としての移民に反感を持ち、一貫して移民規制に賛成した、としているなど、見解の相違は存在するが⁽⁷⁾、焦点となる1924年移民制限法については、黒人は移民規制による経済的メリットのために全体としてこれを容認した、という点で一致している。

しかし当時の黒人指導者の大半が1924年移民法に少なくとも沈黙することで結果的に賛成した中で、W・E・B・デュボイス(William E.B. Du Bois)は例外的に移民規制反対を貫いたとされる。デュボイスの移民観は初期には他の黒人指導者と大きく異なるものではなかったが、第一次世界大戦後、1920年代に入って移民論議が高まると、他の黒人が急速に移民制限賛成に傾いていく中で一貫して移民制限に反対し、1924年移民法の成立後も合衆国の移民政策を批判し続けた。このような移民問題におけるデュボイスの独自の立場は、彼のどのような考え方に由来するのであろうか。後述するように、デュボイスは移民問題をより大きな人種差別の一環として位置づけていたために、移民問題そのものについてまとまった考察をしている例は多くない。しかし19世紀末から1930年代初頭までのデュボイスの移民および移民政策に関する見解を追っていくことで、白人対黒人の「二項対立」化が進行するアメリカ社会をデュボイスがどのように捉え、黒人指導者としてどのように対処していこうとしたのかを探るための手がかりが浮かび上がってくる。それを明らかにすることが本稿の目的である。

注

- (1) 中野耕太郎「新移民とホワイトネス——20世紀初頭の『人種』と『カラー』——」川島正樹編『アメリカニズムと『人種』』(名古屋大学出版会、2005年)141頁。
- (2) Mae M. Ngai, "The Architecture of Race in American Immigration Law: A Re-examination of the Immigration Act of 1924," *Journal of American History*, 86-1 (June, 1999), pp.69-70.
- (3) Desmond King, *Making Americans: Immigration, Race, and the Origins of the Diverse Democracy* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 2000), pp.3, 143-147.
- (4) 大森一輝「アメリカニゼーションとカラー・ライン」油井大三郎、遠藤泰生編『浸透するアメリカ、拒まれるアメリカ——世界史の中のアメリカニゼーション——』(東京大学出版会、2003年)36頁。ボストンの黒人知識人の対応を扱った大森のこの論考は示唆に富む。
- (5) 代表的なものとして、David J. Hellwig, "Black Leaders and United States Immigration Policy, 1917-1929," *Journal of Negro History*, 66-2 (Summer, 1981); Arnold Shankman, *Ambivalent Friends: Afro-American View the Immigrant* (Westport, Connecticut: Greenwood Press, 1982).
- (6) Jeff Diamond, "African-American Attitudes towards United States Immigration Policy," *International Migration Review*, 32-2 (Summer, 1998), p.451.

(7) *Ibid.*, p.453.

(8) 本論では移民のうち、メキシコ人をめぐる問題には触れなかった。考察の対象となる時期が主として1924年移民制限法を中心とした20年代までであるのに対して、メキシコ人が問題化するのはいずれ以降だからである。

1. 第一次世界大戦前の黒人の移民イメージ

本節では、まず中国系移民の存在が問題化する19世紀後半から第一次大戦前までの黒人の移民イメージについて、主として黒人新聞や黒人指導者の発言に基づいたヘルウィグとシャンクマンの実証的研究に依拠してまとめてみたい。

移民のうち、最初に問題になったのが中国人とそれに続く日本人であるが、後述するように宗教等の文化や生活習慣上の相違が大きかったため、彼らについての黒人のイメージは、白人のそれと同様に自分たちとは異質の「外国人」として否定的なものが多かった。しかし移民の否定的イメージを形作る諸要因のうち、最も大きなものはなんと言っても移民が黒人の職を奪い、経済的上昇を阻むのではないかという不安であった⁽¹⁾。とはいえ19世紀後半から20世紀初頭の時期には圧倒的多数の黒人は南部に居住しており、職をめぐる移民との競合は後の時代に比べればまだそれほど現実的でも切実なものでもなかった。黒人に代わる農業労働力として南部に中国人や日本人、イタリア人などの導入が検討されたり試みられる例もあったが、いずれも黒人にとってとくに脅威とはならなかった⁽²⁾。したがって、移民の否定的イメージがそのまま移民制限の要求につながったわけではない。

ヨーロッパ系の移民よりも早く、1870年代にはすでにカリフォルニアで中国人移民に対する暴力や排斥の動きが見られたが、1882年に彼らの入国を禁止する中国人排斥法が成立すると、その後彼らに取って代わる形で増加した日本人移民に対する差別が始まった。すでに述べたように中国人や日本人移民に関しては、その異質な文化が黒人の注目を引いたものの、彼らが黒人と同様の有色人種であったことから、白人による彼らの処遇の人種差別的な側面が黒人の関心を集め、批判の声があがることになる。

まず中国人に関して見てみると、黒人は全体として中国人への反感が強かった。これは宗教上の相違や特異と思われた髪型・服装、賭博やアヘンの吸引のような反社会的とされた行為によるネガティブなイメージに加え、出稼ぎ型の移民が多かったことが理由としてあげられる。職をめぐる競合については、直接的に彼らと接触し、その影響を受ける西海岸の黒人の間に反発が強かった⁽³⁾。

しかしながら黒人は、そのような文化的相違や経済的な競争がとくに中国人を抑圧する理由にはならないと考え、大半の黒人新聞は中国人移民の規制に反対したし、またF・ダグラス（Frederick Douglass）やB・T・ワシントン（Booker T. Washington）のような著名な黒人指導者も中国人の締め出しを非難した。これは非白人を締め出す差別的な法を許せば、同じく非白人である自分たちに

も同様に抑圧が強まることを警戒したためであった⁽⁴⁾。

一方、中国人観と比べると 黒人の日本人観はより複雑でアンビバレントなものであった。黒人新聞紙上に現れる初期の日本人イメージは中国人と同じく異質な外国人以上のものではなかったが、この否定的イメージは日露戦争を境に劇的に変わる。黒人と同じ有色人種の国である日本が白人の大国ロシアに勝利したことは、常に劣等性を背負わされてきた黒人にとっても喜ばしいことであり、日本は有色人種の期待の星となった⁽⁵⁾。それとともに日本が短期間に発展したことや日本人移民のビジネスにおける成功、その要因と考えられた自助的努力や団結心などが賞賛され、黒人も日本人に学ぶべきことが主張された⁽⁶⁾。

また、1906年のサンフランシスコの大地震の後、市内の日本人児童を公立学校から東洋人のみの学校へ転校させようとしたいわゆる隔離学校問題や、日本人移民の土地購入を禁止した1913年のカリフォルニアの外国人土地法の制定に際しては、ともに人種差別主義の被害者としての共感や同情が示された。このような反日的行動は人種偏見に基づく不当なものであり、アメリカの人種差別を象徴するものとして、黒人自身の利害からも非難すべきものと考えられた⁽⁷⁾。

とはいえ、隔離学校問題に際しては、たんなる同情のみでなく、黒人の複雑な感情が窺われた。すなわち、この問題が日米関係を悪化させることを恐れたローズヴェルト大統領が介入してサンフランシスコ市教育委員会の措置を撤回させると、黒人新聞の中には、大統領は外国人である日本人にこのような配慮をするのに、ネイティブである黒人に対する差別はなぜ放置されているのか、という不満から、日本人への反感を示すものが見られたのである。日本人のビジネスにおける成功に対しても、かならずしも賞賛ばかりが向けられたわけではなく、ある種の嫉妬心が混在していたことも事実であった⁽⁸⁾。

黒人の移民イメージを決定する諸要因のうち、最も重要なものが経済的要因であることはすでに述べたが、そのことは黒人がおかれていた経済的状况によって移民に対する見方もさまざまであるということの意味する。ヘルウィグは、黒人の間に反日的態度が見られるとするならば、それは直接的な競争者である西海岸の労働者であると述べているが、実証は困難であるとしている。しかし1913年5月24日の『シカゴ・ディフェンダー』紙によれば、デュボイスはカリフォルニア土地法をめぐる論争のさなかに、上層の黒人は「日本人をめぐる論争と〔黒人〕自身の利害との間の関係を理解している」が、西海岸の「一般労働者」は白人労働者と同様日本人に「断固として敵対」していると述べたとされる⁽⁹⁾。デュボイスの観察の可否はともかくとして、少なくとも黒人の指導者層はこれ以後も比較的原則にこだわり、抑圧された人々の避難所としてのアメリカという建国の理想に背馳する移民制限にもろ手を挙げて賛成することはなかったし、とりわけ移民にかかわる政策に人種差別を感じ取ったときには敏感に反応した。

シャンクマンは、移民についての黒人の意見はしばしば彼ら自身がおかれている「地位や願望」を物語っていると言う⁽¹⁰⁾。そして黒人の否定的な移民イメージが白人のそれを投影したものである

ことを指摘し、L・リヴァインの研究を援用しつつ、黒人が白人と同じ移民への偏見を共有することで、白人マジョリティ＝「主流」との一体感をもつことが可能になることを述べている⁽¹¹⁾。これは実のところ黒人に限ったことではなく、移民の側もアメリカに入国して比較的短時日のうちにネイティヴの白人の黒人観を身につけ、黒人に対して差別的態度をとるようになることが指摘されている⁽¹²⁾。ここにはアメリカ社会の主流への参入をかけて移民と黒人が争う構図が明らかであるが、黒人はとりわけ自分たちがアメリカ生まれのキリスト教徒で、国家に忠誠心をもつよきアメリカ人であることを強調する一方、外国人である移民の非アメリカ性を攻撃した⁽¹³⁾。増え続ける移民の存在にしだいに圧力を感じつつ、アメリカ社会の主流である白人の価値観の受容を自らアピールすることによってよりよい地位を確保しようとする黒人の戦略は、しかしながら現実には成功しなかった。第一次世界大戦を経て、20年代の移民制限をめぐる論争の中でそのことが明らかになる。

注

- (1) Shankman, *op.cit.*, p.156.
- (2) *Ibid.*, pp.9-12, 39-40, 83-104.
- (3) *Ibid.*, pp.4-24.
- (4) *Ibid.*, pp.13-14.
- (5) *Ibid.*, pp.35-36; 竹本友子「アメリカ黒人と日本——両大戦間期における黒人の親日感情と日本の宣伝工作を中心として——」『ヨーロッパの市民と自由——その歴史的諸相の解明』(早稲田大学アジア太平洋研究センター研究シリーズ42、1999年) 257頁。
- (6) Shankman, *op.cit.*, pp.37-38; David J. Hellwig, "Afro-American Reactions to the Japanese and the Anti-Japanese Movement, 1906-1924," *Phylon*, 38 (1977), pp.101-102.
- (7) Shankman, *op.cit.*, pp.41-43; Hellwig, "Afro-American Reactions," pp.95-96.
- (8) *Ibid.*, p.102; Shankman, *op.cit.*, p.51.
- (9) Hellwig, "Afro-American Reactions," pp.102-103.
- (10) Shankman, *op.cit.*, p.151.
- (11) *Ibid.*, p.152.
- (12) *Ibid.*, pp.23, 51-52; Hellwig, "Afro-American Reactions," p.103.
- (13) Shankman, *op.cit.*, p.9; Hellwig, "Black Leaders," pp.111-112; 大森、前掲論文、38-40頁。

2. 第一次世界大戦以降の移民制限と黒人

前節で述べたように、19世紀後半から20世紀初頭にかけての時期には、移民問題は大多数の黒人にとってまだそれほど切実なものとはなっていなかったため、移民制限を求める声は大きなものとはならなかった。むしろ黒人は中国人や日本人移民に対する人種差別的な立法や処遇に敏感に反応し、反対を表明したのである。しかし世紀転換期以降、南欧・東欧からの移民が大量に流入するようになると、白人の世論と歩調を合わせる形で黒人の中にも移民制限を求める声が生じだいに高まってくる。これらのヨーロッパからの移民に対しても、黒人はネイティヴの白人の民族的なステレオタイプや偏見を共有することがめずらしくはなかった⁽¹⁾。

移民制限を求める声の高まりを受けて、第一次大戦中の1917年、連邦議会は識字テストの実施をおもな内容とする移民法を成立させた。この法律は2つの点で黒人には看過できないものであった。1つはアジアからの移民を締め出すための「アジア禁止区域」(Asiatic Barred Zone)が指定されたことで、これによって「中東から極東にいたるアジアのほぼ全域」からの移民が禁止されたが、当時アメリカ領であったフィリピンやグアム、日米紳士協定が締結されていた日本、西アジアのイランやシリア等は除外されていた⁽²⁾。

2つ目は、最終的に採択された法案からは除かれていたものの、審議の過程で排除の対象に「すべてのアフリカ人または黒人」を加える修正案が提案されたことである。これは実際には識字テスト法案自体の成立を妨げる目的で議事妨害の一環として出されたもののようであるが、この人種差別的な提案に対してNAACPはすぐさま反応し、ワシントン支部を中心に強力なロビー活動を行った結果、下院で否決された⁽³⁾。

以上の点から、黒人の間ではこの1917年移民法に否定的な意見も見られたが、黒人は移民制限自体には反対しなかった。増加していた西インド諸島からの黒人移民もこのテストを受けることになったわけであるが、彼らは概して識字率が高かったため、影響を受けることはないと考えられた⁽⁴⁾。

大戦中は一時途絶えていた移民の流入が戦後になると再び始まり、その数は急増した。戦争への協力の見返りとして、参戦のスローガンとなった民主主義が黒人にももたらされ、彼らの境遇の改善が見られることを期待していた黒人は、むしろ戦後黒人への抑圧が強まったことに失望した。彼らはそのフラストレーションの幾分かを移民への敵意という形で表し、また黒人新聞には当時の不安な世相の責任を移民に負わせる論調も見られた⁽⁵⁾。さらに大戦中から戦後にかけて、移民の減少に伴う工業労働力需要を背景に、南部の黒人の北部への移住が大規模に行われた結果、労働市場における移民と黒人との競争は格段に激しいものとなった。こうして移民制限を求める黒人の声はますます高まっていく。

1921年には合衆国の移民政策を大きく転換させた移民制限法が成立する。この法では初めて移民の国別割り当て制度が導入され、1910年の国勢調査の結果に基づいて、当時アメリカに居住していた外国生まれの人口を出生国別に分類し、その数の3%を年間移民許可数として各国に割り当てた。この法は増加の一途をたどっていた南欧・東欧系の「望ましくない」とされた移民を抑制し、北欧・西欧系の移民を優遇することを目指した2年間の時限立法であったが、移民制限を主張する勢力はさらに強力な立法を求め、黒人もこれに同調した。

1924年に成立した移民制限法は21年のその延長線上に位置し、新移民の抑制のためのより強力な内容を含んでいた。各国別に移民許可数を割り当てる仕組みは21年法と同じであるが、算定の基盤となる年を1910年から1890年に遡らせるとともに、割り当てを3%から2%に削減した。さらに1927年以降は年間の移民総数を15万人に削減し、1920年に合衆国に居住する人口のそれぞれの国別起源を確定し、その比率に従って各国に移民数を割り当てることとされた。また、この1924年移民

制限法は「帰化不能外国人」の入国を禁止する条項が付加されていたため、1906年の帰化法で帰化が認められていた「白人およびアフリカ人とその子孫」に含まれないアジア人には最小限の移民枠も与えられないこととなった。

すでに移民制限に大きく傾いていた黒人は全体としてこの1924年移民制限法に賛成した。「帰化不能外国人」の入国禁止条項は明らかに日本人の締め出しを意図した人種差別的な措置であったが、移民制限自体が黒人に有利に働く判断した黒人指導者は、排日条項に目をつぶり、反対を表明しないという形で暗黙のうちにこの法を支持した⁽⁶⁾。

しかしこの1924年移民制限法には、排日条項よりも直接的に黒人に関わる2つの問題が存在した。第1にこの法では西半球は割り当ての枠外におかれたのであるが、植民地からの移民は本国の割り当ての一部として数えられることになっていたことである。このため、西インド諸島からの黒人移民が削減される可能性が生じたが、後にデュボイスが指摘するように、この点に目を留める黒人はほとんどいなかった⁽⁷⁾。

第2の問題は移民割り当ての算定が人種差別的であったことである。すなわち、各国への割り当てを決める基準となる1920年の合衆国の人口があらかじめ本土部分に限定され、アラスカやハワイ等が除外されていた上に、西半球からの移民とその子孫、市民権を取得できない外国人とその子孫、アメリカ先住民の子孫とともに、「奴隷の移民の子孫」、つまり黒人も除外されていた。キングが指摘するように、この法律の制定に携わった人々がアメリカは白人の国であるべきだと考えていたことは明白である⁽⁸⁾。

1924年移民制限法は第一義的に南欧・東欧系の移民の削減を意図しており、その点で、アングロサクソン優越主義に基づいてヨーロッパからの移民を序列化したものであったが、それとともに上に述べた排日条項や西インド諸島出身の移民の扱い、さらに算定からの黒人等の除外に見られるように、白人と非白人の間に明確な一線を画し、南欧・東欧系の新移民は同化可能な白人として国民に組み込み、アメリカを白人の国として再構築しようとしたものであった⁽⁹⁾。それは黒人に関して言えば、ウィルソン政権下での連邦レベルの人種隔離の強化やリンチの横行、人種暴動の頻発に見られるようなすでに存在していた人種的不平等を反映するものであると同時に、黒人を同化不可能な従属的存在と位置づけているその体制を強化し、固定化する役割を果たしたとキングは指摘する⁽¹⁰⁾。西インド諸島に関する規定の差別性を指摘した同地域出身のW・A・ドミンゴや後述するデュボイスを除けば、1924年移民制限法に以上のような意味合いを読み取る黒人指導者はほとんど存在しなかった⁽¹¹⁾。黒人は好意的に見ていた日本人移民に対する差別にも目をつぶり、移民制限が黒人にもたらすであろう目に見える利益を優先したといえる。それどころかこの年移民制限への反対から賛成に転じた『ピッツバーグ・クーリア』紙は、母国に忠誠心を残す移民の排除がこの法の目的であるならば、黒人も「アフロ＝アメリカ人」のハイフンを取り除いて国家へ献身を示すことを提案し、進行中のアメリカ化運動への積極的な参加を呼びかけた⁽¹²⁾。しかしながら、下院の移民委員

会の顧問をつとめていた優生学者のH・ラフリンが、黒人がアメリカの制度や言語、宗教や法律・慣習をどれほど身につけていようと、「ヨーロッパからの移住者とアフリカ黒人との間の血の相違はあまりに大きく、人種的同化はヨーロッパ人にとって受け入れがたい」と述べているように、黒人がいくら同化の意志を示そうとも、白人が引いた人種の境界線は揺らぐことがなかったのである⁽¹³⁾。

注

- (1) Diamond, *op.cit.*, p.455.
- (2) 中野、前掲論文、149-150頁。
- (3) *Crisis*, IX (1915.2), p.190; Hellwig, "Black Leaders," p.113.
- (4) *Ibid.*, p.124, n.16.
- (5) *Ibid.*, pp.114-115.
- (6) *Ibid.*, pp.111, 116-117; Shankman, *op.cit.*, p.165.
- (7) Diamond, *op.cit.*, p.456. ヘルウィグは1924年以降現実に西インド諸島からの移民数が激減したが、同地域に植民地を所有するイギリス等が割り当てられた移民枠を使い切ることはなかったので、移民数の減少をこの条項に帰することはできない、としている。Hellwig, "Black Leaders," p.126, n.39.
- (8) Ngai, *op.cit.*, p.72; Edward P. Hutchinson, *Legislative History of American Immigration Policy 1798-1965* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1981), p.485.; King, *op.cit.*, p.224.
- (9) Ngai, *op.cit.*, pp.69-70.
- (10) King, *op.cit.*, pp.1-2.
- (11) Hellwig, "Black Leaders," p.118.
- (12) *Ibid.*, pp.119-120.
- (13) King, *op.cit.*, p.137.

3. デュボイスの移民観

デュボイスが比較的早い時期に移民に言及した例として、フィラデルフィアの黒人コミュニティに関する社会学的調査の結果をまとめた『フィラデルフィアの黒人』(1899年)が挙げられる。この中でデュボイスは、ドイツ系やイタリア系などの白人移民と黒人との職をめぐり争いと、その結果としての黒人の駆逐について触れているが、そこには移民に対する敵意はまったく見られず、黒人が移民との競争に敗れる理由を冷静に分析している。そして移民のもつ確かな技術力や営業上の創意工夫が競争の勝者たるゆえんであること、また移民が黒人よりも「新しい産業」に適応した訓練を受けているために有利な立場に立てるのであって、人種偏見のみが黒人の職業機会をせばめているわけではないことを指摘している⁽¹⁾。

南部への白人移民労働力の導入についても同様で、移民への敵意や危機感は見られず、1908年には、ギリシャ人やイタリア人が南部で酷使されれば連邦政府は奴隷のような労働を取り締まらざるをえなくなるだろう、と白人移民導入による黒人への副次的効果を期待する発言をしている⁽²⁾。また1907年には、サンフランシスコの日本人児童の隔離学校問題をめぐって、本人の意志に反して強

いられることであれば、「軽蔑の印、劣等性の制度」であり、日本人に対する敵意は黒人に対するのと同種の「人種的な偏狭さと狂信」であると主張している⁽³⁾。移民に対する敵意のなさにせよ、日本人移民への差別に対する批判にせよ、この時期のデュボイスには他の黒人指導者ととくに異なる点はない。

すでに述べたとおり、第一次世界大戦の頃になると黒人の間では移民制限を期待する声が生じ、高まってくるのであるが、デュボイスは1920年に南部の黒人に北部への移住を勧める文章の中で、移民制限を「不正」と非難しつつ、黒人が「鉱山や工場の開かれたドア」に押しかけることで、そのような不正の代償をアメリカに支払わせよう、と述べている⁽⁴⁾。この頃の黒人は第一次大戦にかけた期待が裏切られ、戦前と変わらない無権利状態と頻発する白人の暴力行為への憤りからきわめて戦闘的になっていた。移民への正義を要求する原則へのこだわりを維持しつつ、黒人の直接的な利害を重視する姿勢がデュボイスにも見て取れる。

また、同年に出版した著作『黒い流れ』(*Darkwater*)でも白人移民に対するアメリカの偏見を批判しているが、それでも黒人と違って彼らの社会的権利は保障されているとして、黒人差別との根本的相違を指摘している点が注目される。また、アメリカは移民が到着したその日から彼らに『「黒んぼ」を軽蔑することを教えこんでいる」とも述べている⁽⁵⁾。デュボイスは移民に対する差別と黒人に対する差別を安易に同一視しないよう警告し、人種による明白な境界線が存在していることを主張しているのである。

移民制限に関する論争が激しさを増していた20年代に入ると、デュボイスは大戦後のアメリカ社会の均質化やアメリカ化の風潮を批判している。1922年の『クライシス』誌上の「るつぽ」(*The Melting Pot*)と題する論説では、ニューヨークのある私立学校の優秀な生徒の出身を調べてみると「金持ち、貧乏人、キリスト教徒、ユダヤ人、黒人、白人、伝統派、リベラル、アメリカ人、オーストリア人、ルーマニア人、ロシア人」と、実に多彩な顔ぶれからなっており、これこそデモクラシーの正当性を証明するものであるとした上で、このことは現在かまびすしく議論されている移民制限の提案に関係がないだろうか、と移民制限を暗に批判している。またほぼ同時期の「アメリカ化」(*Americanization*)という論説では、移民に求められている「アメリカ化」が実際には「新たなアングロサクソン礼賛に過ぎない」として、「多くのさまざまなルーツ」を育成するアメリカの発展を主張している⁽⁶⁾。どちらもデュボイスの文化多元主義の立場を示したものである。

すでに述べたように他の黒人指導者がほとんど問題にしなかった1924年移民制限法の西インド諸島からの移民に関する条項に触れているのが、同年12月の『クライシス』誌上に掲載された「西インド諸島からの移民」という論説である。この中でデュボイスは、この条項を見逃した点について、西インド諸島出身の同胞がもう少し注意深く見ていてわれわれに警告してくれていたなら「何か効果的な手段」が取れたかもしれないのに、当時はその重要性に気づかず、結果として西インド諸島からの移民は事実上禁じられてしまった、と同地域出身者に責任を転嫁する形で嘆いている。そして

このような人種による移民制限は合衆国にとって「不幸なこと」だとしている⁽⁷⁾。

1924年移民制限法に帰結するこの時期の移民制限の潮流についてのデュボイスの見方の特徴は、移民制限をより大きな人種差別の一環として位置づけていることである。たとえば1925年には、黒人の抑圧はたんに黒人のみの不幸ではなく、「懸案となっている移民法案における日本人、ユダヤ人、南ヨーロッパ人への侮辱は、アメリカの過去の黒人いじめの論理的帰結である」としている。同様に翌年の「恐怖の影」(The Shape of Fear)という論文では、1920年代の排外主義的空気の中で、KKKをはびこらせている「恐怖」について分析し、それをユダヤ人差別や黒人の抑圧とともに移民制限にも通底するものであるとしている⁽⁸⁾。1924年移民制限法の成立後は、黒人は全体としてこの問題に言及することが少なくなるのであるが、デュボイスはこれ以後も時おり日本人や中国人への差別について批判的に言及している⁽⁹⁾。

施行の遅れていた1924年移民制限法がようやく公布された1929年、デュボイスは黒人が移民制限に反対せずに沈黙している理由を説明している。1つは白人移民の停止が黒人労働者の「経済的救済」になること、2つ目はアメリカという人種差別の国にこれ以上黒人に来てほしくない、ということである。ここで注目すべきは第1の点に関して、黒人が利益を得るのは白人同胞の「苦痛」によってのみであるが、それは黒人の責任ではないこと、またこれらの白人労働者は機会さえあれば「資本家よりもひどく」黒人を打つのだと述べている点である⁽¹⁰⁾。1920年代から30年代にかけてのデュボイスは一方では社会主義やマルクス主義の影響を強く受け、人種に加えて階級という要素を重視するようになるのであるが、白人労働者の黒人に対する人種的偏見や敵意の強さゆえに、彼らに対する不信感を払拭することがどうしてもできなかった⁽¹¹⁾。

またこの論説では、1790年のセンサスに基づけば「合衆国への将来のすべての移民のうち、23%は黒人であるべき」だと主張し、1924年移民制限法の国別起源に基づく割り当ての算定から黒人が除外されていることを暗に指摘している⁽¹²⁾。

デュボイスは大不況のさなかの1933年にも移民に言及しているが、ここでは自分を白人に属するものと考えて白人と同じように振舞い、「アジア人やユダヤ人ばかりでなく、メキシコ人や西インド諸島人にさえ」白人と同様の人種偏見を向ける黒人が問題にされている⁽¹³⁾。

以上、世紀末から1930年代初頭までのデュボイスの移民に関する発言をほぼ年代順に紹介してきたが、最後にそれをまとめてみたい。

注

- (1) W.E.B. Du Bois, *The Philadelphia Negro: A Social Study* (University of Pennsylvania, 1899, reissued, New York: Henry Holt and Co., 1993), pp.97-98, 115-116, 126.
- (2) Shankman, *op.cit.*, p.159.
- (3) Hellwig, "Afro-American Reactions," p.94.
- (4) *Crisis*, XIX (1920.1), p.105.

- (5) W.E.B. Du Bois, *Darkwater: Voices from within the Veil* (New York, 1920, reprint, New York: Oxford University Press, 2007), p.25.
- (6) *Crisis*, XXIV (1922.7), pp.132-133, XXIV (1922.8), p.154.
- (7) *Crisis*, XXIX (1924.12), p.57. 西インド諸島からの黒人移民に対するデュボイスを含めたアメリカ黒人の感情には複雑なものがあったが、ここではその問題に立ち入らない。Irma Watkins-Owens, *Blood Relations: Caribbean Immigrants and the Harlem Community, 1900-1930* (Bloomington & Indianapolis: Indiana University Press, 1996), pp.115-125を参照。
- (8) *Crisis*, XXIX (1925.3), p.201; W.E.B. Du Bois, "The Shape of Fear," *North American Review*, CCXXIII (1926.6,7,8) p.302.
- (9) Du Bois to Mildred Scott Olmstead (1932.3.5), Herbert Aptheker, ed., *The Correspondence of W.E.B. Du Bois, I: Selections, 1877-1934* (Amherst: University of Massachusetts Press, 1973), p.451; Du Bois to Harry F. Ward (1937.10.7), *ibid.*, II: *Selections, 1934-1944* (1976), p.147.
- (10) *Crisis*, XXVI (1929.8), p.278.
- (11) 竹本友子「W・E・B・デュボイスにおける人種と階級」『早稲田大学文学研究科紀要』43、第4分冊(1998)、110頁。
- (12) *Crisis*, XXVI (1929.8), p.278.
- (13) *Crisis*, XL (1933.11), p.247.

おわりに

移民をめぐるデュボイスの言説は、初期には他の黒人指導者と変わるところはなく、移民にはなんら敵意や警戒心を示さず、むしろアジア系の移民に対する人種差別的な措置を批判している。世紀転換期以後、移民が激増し、第一次大戦中の中断を経て戦後に再び移民の流入が始まると、南部から北部の都市へ移住した黒人と移民との労働市場での競争が激しさを増し、黒人の間に移民制限を求める声が強まっていくが、デュボイスは一貫して移民制限への動きや移民に対する偏見を批判し続けた。そして1924年移民制限法が論議される頃にはほとんどの黒人指導者がこの問題に沈黙するという形で移民制限を事実上容認するのであるが、デュボイスは移民制限反対の立場を貫いた。これは他の黒人指導者が、移民の流入停止による黒人の経済的利益という直接的な利益を重視したのに対し、デュボイスが移民制限をアメリカの人種差別という、より大きな問題の一環として位置づけたからであり、黒人にとって争うべき相手は移民ではなく、両者をともに抑圧するアメリカの体制自体であった。すでに見たように他の黒人指導者と同様にデュボイスも第一次大戦直後には黒人の利益という観点を前面に掲げ、それが移民観にもある程度投影されているのが見て取れる。しかしこの頃すでにアメリカの人種差別や移民制限を世界規模での有色人種に対する抑圧という大きな枠組みの中で捉えるようになっていたデュボイスは、移民制限がもたらす黒人の直接的利益という狭い観点にとどまり続けることはなかった。

1924年移民制限法の西インド諸島に関する条項や移民割り当ての算定からの黒人の除外についてデュボイスが触れていることから、この法律が一見するとヨーロッパ系の新移民を対象にしているかのように見えて、実は合衆国における黒人の位置づけに深く関わっていることをデュボイスが意

識していたことが窺える。他の黒人指導者や黒人新聞がこの法を容認する中でぶれることなく反対を貫いたのは、そのためでもあろう。

さらに大不況のさなかに彼が批判した白人化する黒人とは、1924年移民制限法の支持に転じた『ピッツバーグ・クーリア』紙が主張するハイフンの取れた黒人、すなわち移民との競争の中で自ら進んでアメリカ化し、外国人である移民よりも有利な位置を得ようとする黒人像と重なるものである。1924年移民制限法が黒人に意味するものを感じ取っており、黒人がどれほど「同化」しようとカラー・ラインが揺らぐことはないということを理解していたデュボイスにとっては、それはむなしい行為であったろう。目指すべきはさまざまな民族・人種がアメリカ化＝アングロサクソン化せずに共生できる文化多元主義であり、また移民と黒人のどちらをも抑圧するアメリカの体制を手を携えて変革することであった。

とはいえ白人労働者の黒人に対する敵意や新来の移民がすみやかに身につけていく人種偏見の強さを考えると、デュボイスには人種を超えた労働者の連帯は不可能に感じられた。そのため1930年代の経済不況によって黒人の境遇がさらに悪化する中、結局彼は人種を捩り所とした方策を模索していくことになる。